

KEIO SFC REVIEW

No. 71
Summer 2021

特集

可能性を紡ぐ

見出した新しいキャンパスライフ

連載

わたしの推薦図書

森嶋 桃子 / 島津 明人

贈る言葉

清木 康 / 武藤 佳恭 / 加藤 眞三

本誌ができるまで

特集

可能性を紡ぐ

見出した新しいキャンパスライフ

04 わたしの SFC map

08 サークル活動奮闘白書



板谷 勇飛 (環境情報学部 3 年) / 井上 絵里加 (総合政策学部 3 年)
水口 凌 (総合政策学部 3 年) / 湯田 瑞希 (環境情報学部 3 年)

12 もっと!サークル活動奮闘白書



SAPnmc、慶應マリン、秋祭実行委員会、KBC

14 授業インタビュー ～「体育 1」の取り組み～

GIGA クラス

江川 葵 (環境情報学部 4 年) / Kyla Waitze (総合政策学部 1 年)
Gordon Cui (環境情報学部 1 年)

日本語クラス

泉川 茉莉 (総合政策学部 1 年) / 齋藤 賢吾 (環境情報学部 1 年)

寄稿 東海林 祐子 (政策・メディア研究科准教授) / 山田 貴子 (総合政策学部非常勤講師)

18 編集部による座談会 ～進化し続ける SFC 授業の実態～

寄稿 武田 圭史 (環境情報学部教授) / 石川 初 (環境情報学部教授)
宮川 祥子 (看護医療学部准教授) / 鈴木 寛研究会

連載

22 わたしの推薦図書

森嶋 桃子 (湘南藤沢メディアセンター レファレンス担当)
島津 明人 (総合政策学部教授)

26 **新** 贈る言葉

清木 康 (慶應義塾大学名誉教授)
武藤 佳恭 (慶應義塾大学名誉教授)
加藤 眞三 (慶應義塾大学名誉教授)

30 本誌ができるまで

32 From Editor

COVER



SFC 3Dmesh v1.0
Nagashima Koki

SFC Pointcloud 2020
Drone Scan by Keiji Takeda Laboratory
Ground Scan by Hiroya Tanaka Laboratory
Point Processing by Takumi Moriya



SPECIAL

- 04 わたしの SFC map
- 08 サークル活動奮闘白書 座談会
- 12 もっと！サークル活動奮闘白書 アンケート
- 14 授業インタビュー ～「体育1」の取り組み～
- 18 編集部による座談会 ～進化し続ける SFC 授業の実態～

見出した新しいキャンパスライフ

特集 可能性を紡ぐ

No.
71

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、世の中が目まぐるしく変化した2020年。いろいろなことが「今まで通り」にはいかなかった。そして「新しい生活様式」は、大学生活にも求められることとなった。オンライン授業にリモートサークル活動、手探りな状況下においても歩み続けた教員や学生の活力に迫る。

わたしの

SFC map

豊かな自然と最新のテクノロジーが詰まったキャンパス、それがSFC。鴨池に寝そべりながら友達と食べるご飯、たくさんの仲間たちに囲まれながら受ける授業。そんなかつてのキャンパスライフに思いを寄せる今、お気に入りのSFCスポットを学生たちに聞いた。

ψ

φ

Δ

τ

ローソンの前の一人用の椅子



授業1時間前くらいにSFCに到着して、中高前でバス停を降りてそのままローソンに直行。チョコレートとコーヒーで温まる時間が至福。長い通学時間の疲れが吹っ飛ぶ!(るな)

鴨池ラウンジ



空きコマをゆったり友達と過ごすにも、学生団体やサークル、授業のグループワークなどのミーティングを行うのにも適している場所です。(時間を忘れて語り合ってしまう、授業に遅れそうになることも...?) (やよい)

τ館の1階ラウンジ



ガラス張りのラウンジは、SFCの綺麗な空と人の往来がよく見えます。夜になると残って作業している光がキャンパスを照らします、SFC年長者が集うゆっくりにできる場所です。(あや愛)

φ(クラブハウス棟)



授業間や授業後などの空き時間に部室に行くとき誰かしらがいて憩いの場でした。また、部室でサークルの仲間と集まれるようになって欲しいです!(カモネギ)

鴨池



私は、文字通り鴨が泳いでいる池「鴨池」の周りでゆっくりとした時間を過ごすのが好きです。1人で音楽を聴きながらぼーっとしたり、空きコマに友達とおしゃべりをしたりします。(ななみ)

食堂の脇、SFC中高から鴨池に続く階段



騒がしさと静けさが共存しているところ。木でできている階段なので、座ると温もりを感じられるのもなおよし。(みゆ)

κの2階



元々は喫煙所だったらしいのですが、今はほとんど人も入らないので、晴れた日には青空を独り占めしながらお昼寝できます。さながらジェームズ・タレルの作品みたいなスペースです。(hnk)

ι11の窓際の席



ι11は授業でもよく使用される教室ですが、窓が大きく室内からでもキャンパスや論吉像を見渡せます!自然光のパワーを得られるので、空きコマの自習にもおすすめです!(Chiaki)

鴨池



晴れた日の鴨池は風がとっても気持ちよくて思わず木の陰に寝転がって本を読んだり、ご飯を食べたりしてしまいます。ふらっと立ち寄ると友達に会えるところも好きです。(かりん)

サブウェイ上のテーブルがある場所

下のサブウェイで食べ物を買ったり持ち込んだりして、鴨池を眺めながら友達と仲良く食事ができます。(駿人)



サブウェイ

私のおすすめの場所はサブウェイです！鴨池が一望でき、バス停にも近くて、居心地が良いのでよく利用します。おすすめはカフェラテフロートです！ぜひ飲んでみてください。(あおい)



サブウェイ

お腹が空いて少し休憩したくなったらサブウェイに行くのがおすすめです！全面ガラス張りなので、キャンパスの綺麗な景色を背景に休憩時間を過ごせます。(ゆうき)



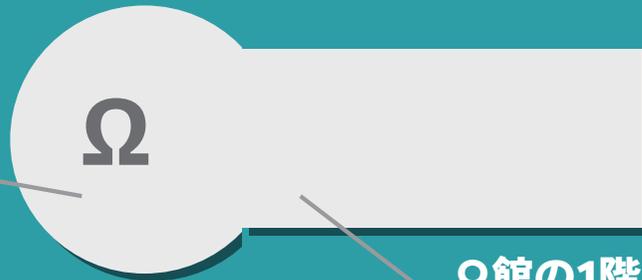
サブウェイ

鴨池の目の前にあり日当たりが良く、長居してしまいます。友達と話すのにも一人で勉強するのも適しています。(あやか)



Ω館内の階段の裏のスペース

ここに座って作業していると、自分の存在がないかのように、みんなスルーしていきます。人の視線を感じない空間は貴重です。(釣り師)

Ω館の1階

入学前に英語のテストを受けた場所でもあり、最後の七夕祭にて仲間達と派手な服を着ながら(写真)全身を絞り出して歌った思い出の場所でもある、オメガの1階が恋しいです！(小百合)



在宅実習棟

吹き抜け2階建ての在宅棟実習棟は、とても広くて造りも本物そっくり。おばあちゃん家の様な温もりを感じながらしっかり在宅看護を学べる場所です！(舞衣)




中庭

中庭にテラス席のようなところがあって、晴れる日はポカポカしていて静かだから落ち着いて気持ちいいです。友だちとのんびり過ごせて至福の一時になります。(みく)



SBC滞在棟Iのキッチン

キャンパス内で学びと交流しながら料理できる、しかも広くて本格的なキッチンが使いやすい。初期のまだ調理器具がない頃、有志で備品を揃えたりしたのは懐かしい思い出。(あや愛)



SFCキッチンカー

私は友人とともに、キッチンカーのプロジェクトを行っているのですが、そこから見られる、緩やかな人の繋がりや、穏やかな時間から成る風景がとても大好きです。(響子)



テアトロン

僕とテアトロンの出会いはデザインスタジオの授業でした。友達2人と行ったテアトロンの実測は今でも忘れません。模型も制作したのですが、なかなかのやりがいがありました。(Masahiro)



キャンパスまでの並木道

バス停「慶應大学」からキャンパスまでの道。並木道が季節の移り変わりを感じさせてくれます。バスから眺めるもよし、ゆっくり歩くもよし。(たひら)




サークル活動奮闘白書

塾内全ての学生団体は、2020年3月末頃から対面での活動の自粛や延期を余儀なくされた。そのような状況下で、各団体の活動はどのように行われたのだろうか。今回は座談会という形をとり、アカペラシンガーズ K.O.E.、Dance Unit W+I&S、sense. (デジタルクリエイティブ領域を追求するサークル) の3つのサークルの代表に「オンラインでのサークル活動」について語ってもらった(2021年2月実施)。



司会
 sense. 板谷 勇飛 (いただに・ゆうひ) 環境情報学部3年
 アカペラシンガーズ K.O.E. 井上 絵里加 (いのうえ・えりか) 総合政策学部3年
 Dance Unit W+I&S 水口 凌 (みずぐち・りょう) 総合政策学部3年
 KEIO SFC REVIEW 編集部 湯田 瑞希 (ゆだ・みずき) 環境情報学部3年

●新しいつながりをつくる
 | 対面での活動禁止を受けてどのよう
 に動きまわりましたか。

井上：新歓が対面できなくなっ
 しまったので、TwitterやLINE
 のようなSNS、Zoomをフル活用
 して行いました。また、その
 頃からオンラインで一つの曲
 を作る活動を始めていたの
 で、四月頃にその映像を
 YouTubeで公開しました。毎週
 火曜日と金曜日に活動してい
 ましたが、新型コロナウイルス
 の影響で、昨年の四月から
 は活動頻度を減らしていま
 す。

水口：Dance Unit W+I&S、K.O.E.と
 同じようにInstagramやZoomで
 新歓を行いました。僕たちの
 サークルは、年に二回ある大
 きな公演に向けて練習をする
 のが主な活動内容です。しか
 し、その一つである春公演が
 新型コロナウイルスの影響で
 開催できなくなりました。ま
 た、全てZoom上で行うこと
 になりました。

板谷：僕がサークル代表として行っ
 たことは、メンバー同士がお
 互いに繋がりがりやすくなるよう
 に、Discordというコミュニ
 ケーションツールを使うよう
 にしたこと。また、今後
 どのような形で活動できるか
 分からなかったため、活動を
 全てプロジェクトベースに移
 行させました。Discordの中に
 新規プロジェクトの募集版と
 してチャンネルを立ち上げ
 て、リーダーとして活動をし
 ていきたい人が自由に書き込
 むようになりました。参加し
 たいと思えばいくらでも参加
 でき、さらに「こういうこと
 がやりたい」というのがあれ
 ば、一年生でもすぐにプロ
 ジェクトの参加者を集めるこ
 とができるのです。

●一年生が仲間になるための工夫
 | 二〇二〇年春から夏にかけての活
 動内容を教えてください。

井上：元々開催予定だったサマーコ
 ンサートは中止になってしま
 ったので、代わりに「ハロウィン全
 体会」を開催しました。これは、
 一年生が仲間になるための工夫
 として、対面での活動ができな
 くなったので、オンライン上で
 行うことにしました。この引退
 公演は、毎年、秋祭りで四年生
 の引退公演を行っていたのですが、
 昨年は秋祭りの開催が中止にな
 り、引退公演がなくなりました。

水口：夏の時期は一・二年生で作品
 を出すことが毎年の恒例でし
 た。今年も開催できなくな
 りました。それに加えて一年
 生は、大学からダンスを始め
 た人が多いので、ダンスに触
 れる機会を作らなくてはいい
 感じでした。そこで、二年生が
 主体となって、

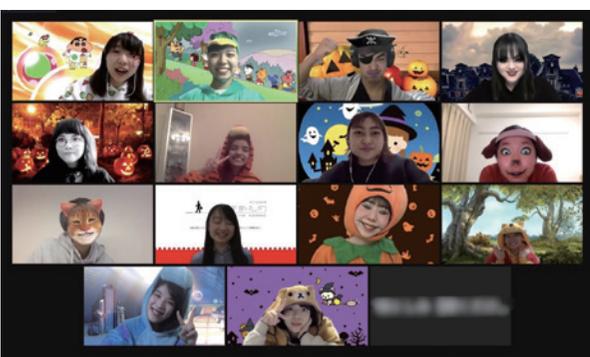
一年生に向けてZoomでワー
 クショップを開催してしまし
 た。ワークショップでは、ダ
 ンスのジャンル説明や基礎的
 な技を教えるといったことを
 行いました。

板谷：何度かミーティングを開き、
 交流の機会を増やそうとして
 いましたが、やはり発言しづ
 らい雰囲気になっていったと思
 います。そこで、一年生には
 「新歓イベント」を作っても
 らうことにしました。新歓イ
 ベントを作ってくれた一年生
 同士は、お互いに距離が縮
 まったようで、サークル自体
 も和やかになってきた感覚が
 ありました。また、映像編
 集などの技術的な解説をZoom
 上で行ったり、新しいプロ
 ジェクトを立ち上げやすい環
 境を作ったりしていました。

●進み出したそれぞれの活動
 | 二〇二〇年秋から二〇二一年冬に
 かけての活動内容を教えてください。

井上：オンラインの状況が長期化しそ
 うだったので、全体の集まりで
 は、レクだけでなく歌の練習を
 工夫して行うようになりました。
 全員で歌う全体曲は、トッ
 プ、セカンド、サードという三
 つのパートに分かれています。
 それぞれにパートリーダーがい
 るので、その人だけが声を出
 し、その他の人はミュートにし
 て声を出す。この流れで音を覚
 えていく練習をしていました。
 また、パートリーダーがあらか
 じめ音源をとり、全てのパート
 を混ぜ合わせたものを流すと、
 それと合わせて歌うことでハ
 モっている感覚を得ることがで
 きることがわかりました。

水口：毎年、秋祭りで四年生の引退公
 演を行っていたのですが、昨
 年は秋祭りの開催が中止にな
 り、引退公演がなくなりました。



K.O.E. 活動 (ハロウィン全体会) の様子

井上：Instagramで配信されていま
 したよ。見ました！
 水口：そうですね、見てくださっ
 たら嬉しいです。ありがとうございます。
 湯田：Instagramでの配信で反響はあ
 りましたか。
 水口：そうですね、見てくださっ
 たら嬉しいです。ありがとうございます。

方はかなり多かったという印象です。OBやOGの方だったり、離れた地域に住まれている方にも見ていただけだったので、そういった面で配信したのは良かったと思います。

湯田：なるほど、それはオンラインの良いところですね。sense.の現在までの活動内容を教えていただけますか。

板谷：秋頃に三田祭のステージ演出をして欲しいという話が入ってきました。その時点ではオフラインで開催するか否か決定していませんでしたが、最終的には完全オンラインということが決まりました。クラウドファンディングを行った結果、一〇〇万円を集めることができたので、一年生からすると「急に大きいプロジェクトがはじまったぞ」という感じだったかもしれないですね。演出する団体が四団体あったので、それぞれチームに分かれ自主的に調べながら演出を考えていきました。結果、期待を遥かに超えるようなクオリティの作品を出し

てくれて、かなり良い形になったかなと思っています。そこまでの製作過程は全てオンラインでしたが、公演の当日に初めて実際に会うことができたんです!!²⁰²²で何十回も顔を合わせていた分、変な感じがしましたね(笑)。

●「会えない」という壁 —オンラインサークル活動の問題点や、それをどのように解決したのか教えてください。

井上：問題点は二つあると思っています。一つ目は人間関係が築きにくいということです。今までは授業の空きコマでバンドの練習をしたり、キャンパス内ですれ違った時に挨拶をしたり、そういった小さな積み重ねで人間関係を構築していました。しかし、オンラインでは交流の機会を意図的に設けないと人間関係が築きにくいので、全体での集まりは定期的に行うようにしていました。また、誰でも入れる

²⁰²²の部屋を立ち上げたり、先輩に積極的に連絡をするようにしていました。二つ目は、目標がなくなってしまうことですね。今までは、コンサートが年に三・四回あったので、それが大きな目標でした。今は開催できなくなってしまうので、モチベーションを保つことが難しくなると感じています。そこで、対面で集まれた時にはサークル内で小さいライブを行いました。あとは、先輩の引退の時期に合わせて²⁰²²を使っちゃよつとしたイベントを企画したりもしましたね。

ますね。この問題に関して特別な解決策とは言えませんが、ひたすら一年生向けのワークショップを²⁰²²で行っていました。個人的に思う一番大きい問題点は、どうしてもパソコンの性能や²⁰²²の環境で音ズレ、動きのズレができてしまうことです。一年生に教える際もバラバラになってしまっていたので、伝わりにくかったんじゃないかなと反省しています。これはオンラインでダンスをする上での大きな課題だと思っていますが、まだ解決策はわかっていませんね。

板谷：単純に楽しくないということですね。それが顕著に感じられるのは、企画が立ち上がって見通しをつける時です。オフラインの時なら、どんなに面倒な作業でも「友達と一緒にだから頑張ろう」という気持ちになれていたんです。しかし、それが無くなってしまくと、「なんでこんなこと思きやいけないんだろう」と思

うことは正直ありました。その結果、本当にサークル活動をやりたい人しか企画の立ち上げをやらなくなってしまったということがありましたね。「やりたい人だけやればいいじゃん」となるのもわかからなくはないですが、本気でやりたいと思う人が果たしてどれほどいるのかということと、プロジェクトに残った人の負担が重すぎる事態を招いてしまうのでは、という懸念があります。

●離れた場所でも繋がれる —オンラインになって良かったことはありますか。

井上：先ほど水口さんのお話で、離れた場所からでもお客さんに見てもらえるという話がありました。サークルの活動自体も離れた場所から一緒にできるようなったというのは良い点かなと思います。九州や海外からも参加してくれる人がいたりして。あと、サー

クルのOBやOGと繋がれる機会を作ることができたというのも良い点だなと思っています。K.O.F.は二五周年記念ということで、現役メンバーが作ったオリジナル曲を²⁰²²や²⁰²²の方々と一緒に歌って、それをYouTube上で公開することができました。

板谷：良かった点に関してはあんまり思い浮かばないですね。個人的なことというところ「モチベーション管理の大変さ」が分かったことくらいです。一刻も早くオフラインに戻って欲しいなと思いますね。

水口：個人的な話ではありますが、自分のダンスと向き合うことができた点は、オンラインになって良かったことですね。やはり、オンラインではダンスの細かい動きが伝わりにくいので、言語化するために自分の踊りと向き合うようにしました。どんなふうに説明すれば初心者でも上手く習得できるのか考えさせられましたね。これは自分の中ではプラ

スだったかなと思っています。

●本当の想い —これからもオンラインでの活動が続いていくと思われます。それを踏まえて今後の展望を教えてください。

井上：一年生同士で仲を深められるように、一年生が主体となる企画を進められたらいいですね。また、バンド映像や音源の作り方なども引き継いでいきたいなと思っています。

板谷：もうちょっとサークルのメンバーと仲良くなりたいということに尽きるかなと思っています。一年間オンラインでやってみましたが、これ以上オンライン上で仲を深めるのは正直無理かなと思っています。なんとかして直接会って活動をするという形をみんなが模索していく必要があるのかなと考えています。

水口：かなり厳しい状況ではありますが、六月の春公演はオフラ

インで開催したいと思っています。昨年の春公演はオンラインで行いましたが、フォーメーションや一体感の面から限界があると感じました。ただ、この一年間で様々な映像作品が出てきたので、もしオンラインでの公演になるのであればそれらを参考にしながら作り上げていきたいと思っています。

湯田：そうですね、少しでも早くオフラインで活動できる日が来ると良いなと思います。では、この辺で座談会を終わります。皆さま、この度はお集まりいただきありがとうございます！

(構成：湯田瑞希／飛弾 香花)



もっと! サークル活動奮闘白書

SAPnmc、慶應マリン、秋祭実行委員会、KBC、4つのサークル代表に1年間にわたるオンラインでの活動と今後の展望をアンケートに綴ってもらった。

サークル紹介

SAPnmc (看護医療政策学生会) → SAP

慶應義塾大学看護医療学部2年生を中心として、看護学生ならではの視点を活かし研究を行なっている。看護医療学部1期生から引き継がれており、今年で20年目となる公認サークルである。

慶應マリン (慶應義塾大学海洋研究会マリンヨットクラブ) → マリン

毎週土曜江ノ島でSUP、ウインドサーフィン、クルージングの3種目の活動をしている。

秋祭実行委員会 → 秋祭実

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)の学園祭である「秋祭」を、SFCの学生をはじめとして、来場者の方々が楽しめるように運営している。

KBC (Keio Business Community) → KBC

慶應義塾から新規事業を創出するために必要な人材や知識、リソースの創発が起こるプラットフォームの構築活動を行う。また、アントレプレナーシップを身につけるために刺激しあい、プロジェクトに挑戦している。

3 / オンラインで活動を進める上での 問題点や解決策を教えてください

- SAP** オンラインの問題点は、一人ひとりの行う作業が可視化されにくいことでした。そこで、解決策として、オンラインでも「顔の見える機会」をみんなで大切にしよう心がけました。
- マリン** 私たちは、海でマリンスポーツをするサークルです。そのため、オンライン上では、実際の体験から動作を教えたり、サークル活動の魅力を伝えるという側面が大幅に制限されてしまうのが問題だと思います。
- 秋祭実** 個人活動になって不安になったり、活動のやりがいを見失わないように、綿密なコミュニケーションを心がけています。

4 / オンラインになって よかったことはありましたか

- SAP** オンラインでは、物理的な負担が軽減され、朝のスキマ時間を有効活用できたことが良かった点です。
- マリン** オンラインの特性として雑談を行いにくい環境である為、一人ひとりの部員の話をしつくり聞く機会が増えました。
- 秋祭実** どこにいてもすぐに集まることができるため、より多くの部員が参加できるようになり、活動がしやすくなりました。
- KBC** オンラインが当たり前になったことにより、時間や場所を気にせず、気楽に集まれるようになりました。例えば朝まで雑談し続けるとか(笑)。気楽なのがよかったポイントですね。

5 / 今後の活動予定を教えてください

- SAP** SAPnmcは2年生を中心に研究活動を行なっています。次年度の2年生が研究成果を残せるように、OBOGみんなで全力でサポートしていきます。
- マリン** マリンスポーツをするサークルである以上は外で活動したいと考えているため、活動許可が出るまでは、定期的な部員の交流会に加え、動画などを使用してマリンスポーツについて学習する機会を設けたいと考えています。
- 秋祭実** 秋祭実行委員会は、運営団体であるが故に堅苦しい団体のように感じてしまいがちです。私たちは、あくまで「数あるサークルの中の1つ」ということを忘れずに、オンラインでも楽しく活動できるように工夫していきます。
- KBC** 対面で会えないと、どうしてもメンバーの心の距離が離れていってしまうので、頻繁に顔を合わせる機会を作っていこうと思っています。

※1 ナッジ(nudge: そっと後押しする)とは、行動科学の知見(行動インサイト)の活用により、「人々が自分自身にとってより良い選択を自発的に取るように手助けする政策手法」

1 / 対面での活動禁止を受けて どのように対応しましたか

- SAP** SAPでは、活動を全てオンラインに切り替え研究を続けています。今年度は、「ナッジ^{※1}を用いた感染対策」を研究している立場として、感染対策の徹底に努め、オンラインで頑張っています。
- マリン** 大学からの活動許可が出るまでは課外での活動は中止し、オンラインで部員間の交流の場を定期的に設けていました。
- KBC** 早い段階で対策を立てて、採用からミーティング、コンテンツまで全てオンライン化して質を落とさず実行しました。

2 / オンラインでどのように 活動を行っていますか

- SAP** 週に1~2回ミーティングを行っています。アンケートや研究発表もオンライン上で実施しました。
- マリン** 人狼やAmong Usなどのゲームを通して、交流を深めています。また、履修に関する情報交換も行っています。
- 秋祭実** 定期的にZoomでミーティングを開いたり、slackというアプリを用いて情報共有を行っています。
- KBC** 週に一度オンラインで集まる会を設けつつ、Facebook messengerとZoomを活用して、外部の企業や起業家、学生を巻き込んだアクセラレータープログラムを行っています。

授業インタビュー ～「体育1」の取り組み～

オンライン授業のなかでも特に学生の関心を集めた授業がある。それは、1年生の必修科目である「体育1」だ。「SFC体操」を作るといふ今までにない授業や学生の特技を活かし作曲・編集をするクラスもあった。今回はそんな「体育1」について、GIGAクラスと日本語クラスの受講者、SA (student assistant)、担当教員に振り返ってもらった。

GIGAクラス



SA
江川 葵
(えがわ・あおい)
環境情報学部4年



Gordon
Cui
(ツイ・ゴードン)
環境情報学部1年



Kyla
Waitze
(ウェイツ・カイヤ)
総合政策学部1年

●オンライン授業では「家で集中できる環境づくり」を
自宅から授業を受ける生活はどう
でしたか。

Cui: 実はカナダからずっとオンライン授業を受けていたので、時差の影響がありました。(笑)。ただ、毎週同じことを行っていくうちにだんだん慣れることが出来てよかったです。ブレイクアウトルームを使用している経験でした。

Waitze: 家から出ることなく授業を受けることは楽ですが、一日中机に向かっていると怠けてしまうし、気分的に疲れて行動する意欲が少し下がってしまいう気がしました。家の外に出ることすら出来ないのも、授業を聞く以外に何もしくなってしまう、毎日が無駄に過ぎていく感じがしました。またZoomのブレイクアウトルームでほとんどの人が話さないこともあり、議論がしづらかったり、他の人が何を考えているかを推測しながら話さなければならなかったことに、難しさを感じました。

●オンライン授業を受ける際、自
分に工夫したことを教えてください。

Cui: カナダ時間に合わせた睡眠時間が短くなってしまいうため、日本時間に合わせて生活をしました。

Waitze: 講義形式は一方通行になりやすいので、自分から意見や質問をして授業に参加しようと思いました。また、授業に集中できるように携帯を近くに置かず、静かで気が散らない環境で授業を受けるようにしました。

Cui: クラスに関しては僕も集中力が途切れないように携帯を遠くに置いておきましたね。

江川: 私を含めた学生は、先生側から「どういう体勢で授業を受けているか」が正直見えないことに油断しがちじゃないですか(笑)。画面オフだと寝てしまうことかもあると思うんです。でも、そこを少し整えるだけで意識も高まると思うんです。家であっても学校であることを意識して授業は必ず机に座って受けていましたね。

●SAとして「気軽に発言しやすい
雰囲気」

江川: オンラインだと「先生から学生」という一方的な雰囲気にならなくてもなってしまうので、気軽に発言しにくい雰囲気があります。ただSAの中で「静かな体育は面白くないよね」と相談し、まずは先生とSAで雑談を試みて全体の雰囲気が柔らかなるよう工夫しました。

Waitze: 初めて会う人が多かったのですが東海林先生もSAさんもエネルギーがあつてとてもよかったです。ハロウィンにはコスチュームを着て授業を行っていたのも楽しかったのですが、そういう小さな気遣いが嬉しかったですね。

●ハロウィンで仮装をされていた
んですか!!

江川: ちょっとぴり仮装をしました(笑)。私はカチューシャだけでしたが、東海林先生はパンプキンの仮装をしていた記憶があります。そういうところで国際的な色も出たのかなと

Think: 思います。
Cui: 東海林先生がエネルギーな方でよかったです。改めて思いますね。堅苦しかったり、厳しい先生だったら、ここまで楽しく授業を受けることは難しかったと思います。

●「体育1」はGIGA生に合わせ
て武道を取り入れた授業に
オンラインで授業を受講してい
か
が
で
し
た
か。

Cui: オンラインでの体育に不安な部分もありましたが、こうしたコロナ禍でも小さなスペースで体を動かせる良い機会をもらえてよかったです。

Waitze: 私も履修前に体育でどういうことをするのか何とも知らず不安でしたが、実際にやってみて思ったよりも良いと思いました。ただの体操だけではなく、日本の武道を教わり一緒に体験できたのは興味深かったです。ただ、パソコンの前でビデオをつけて何か動作するのは少し怖かったです(笑)。

江川: GIGAクラスということもあ

り、武道や空手といった日本の文化を取り入れながら各自の部屋の中でも一緒に動作ができるような体育に今期は取り組みました。自分もGIGA生ですが、私が一年生の時に行った体育とは違って、こころが違い、東海林先生の方で工夫されていたのだと思います。

Cui: 空手と剣道は、こういう機会がなければ自分からは学ばなかったと思うので印象に残りました。

Waitze: それと、東海林先生の授業では瞑想の時間がありました。私は「体育1」を受ける前から瞑想の習慣があったのですが、授業で改めてそういう機会をいただけただけでメンタルヘルスの管理もできてよかったです。

●SFC体操ではオフラインで撮影
したグループも
今回はクラスで一つのSFC体操
を作ったことも特筆点だと思います。
感想を教えてください。

Waitze: 他の授業ではプレゼンテーションやレポートでの課題が

多かったため、最終発表がSFC体操だったのはクリエイティブなところが好きで私にとって良かったです。

Cui: GIGAのクラスにはいろいろな人がいてそれぞれの持っているスキルも違うので、それを活かしながら一つの発表に向けて一緒にできたのがよかったです。今までもこういうことはやったことがなく難しかったです。楽しかったです。

江川: 私も初めての経験なので、どういふものができるのかわかりませんが、メンバー同士がコミュニケーションを大事にしていて最終発表では素晴らしい作品ばかりでびっくりしました。とあるグループでは、日本にいる人たちが実際に集まって、中国にいるメンバーを合成した映像にしている印象的でした。「こんな状況でもやれることがあるんだ」と改めて思い、完成度の高さに驚きました。
(構成・青木 陽花 / 山田 璃々子)

日本語クラス



齋藤 賢吾
(さいとう・けんご)
環境情報学部1年



泉川 茉莉
(いずみかわ・まり)
総合政策学部1年

●受け身では何も起こらない
—オンライン授業という形式で始まった大学生活はいかがでしたか。

泉川..自分で率先して動かなければならないことを実感しました。怠ける時間を最小限にするために、常に人がいる環境に身を置くことを意識していました。

齋藤..僕も概ね同じで、オンラインでは受け身になりがちなので、授業に対する意識が落ちてしまいがちと感じていました。だからこそ、授業に対して当事者意識を持つことを意識していました。例えば、授業で習うことに関して徹底的に予習して結論が出なかったところを教授やゲストに質問する、授業で習ったことを休み時間に自分の言葉でまとめることは必ずやっています。

●より充実した時間にするために
—SFCは体育が必修になっている珍しい学部ですが、オンラインで体育を受けるといのはどういった感覚でしたか。

泉川..最初は「オンラインで体育？えっ？」という感覚でした。正直、あまり期待していませんでした。思ったよりか、暑休めのような感覚でした。ただ、齋藤さんがしてくださったプレゼンが転換点になりましたね。

—齋藤さんのプレゼンというのはどのようなものなのでしょうか。

齋藤..僕らのクラスでSFC体操操をみんなで作るか、個人でチームを作って違うことをやるかという話し合いに二コマ使った話でも話さずとも。そこで、いかに僕たちが別々にやることに意義があるかという話をロジカルに伝えました。泉川..私にとって授業中に齋藤さんがしてくださったプレゼンは、大きな学びがありました。

—プレゼンはどういった内容でしたか。

齋藤..子どもはやりたいことに正直だけで、大人になるにつれ周りに合わせるようになってしまふ。でも僕はそれが嫌で、大人でもやりたいことを主張すればいいと思ってるんです。例えば、単位を取らななきゃとか課題をやらなきゃといった外発的動機では学びの本質を失ってしまう。楽しく遊んでると気づいたら身体を動かしていったという状況にするのが望ましいと思ってる。もしそれが出来ないなら、悪いのは環境でも先生や友だちでもなく自分だよね、という。実際にSFCのウェルサイトにも、どちらの学部もともに主体的に人を巻き込んで行動することを方針の一つとして示しているように感じました。つまり、僕たちが授業を通して学ぶべきこ

—とは主体性だと主張したんです。

泉川..このお話を初めて聞いたとき、授業は単位を取るために存在するのではなく、自分がどういう風になりたか、どういったことを考えるための手段なんだなということに気づきました。タスクを入れたチェックボックスを片付けていくだけでは、大学生活は本当につまらなくなってしまうんじゃないかと思いました。

●主体的に動くことこそ、SFCの学生らしさ

—では、実際の活動内容はどのようなものでしょうか。

齋藤..泉川さんが作ってくれたプレゼンの難型に従って、やりたことがある人がプレゼンをし、その内容に賛同した人とチームを作る形になりました。プレゼンした人がリーダーとしてチームを動かす形で行いました。

—活動期間はどれくらいあったのでしょうか。

泉川..約二週間です。授業内で出来ない仕事もあったので、自分の時間を削りながら作っていました。私のセルフフットワークチームは二人だったのですが、お互い遠慮せずに思ったこと、お互い遠慮せずに思ったこと、お互い遠慮せずに思ったことをお互いに伝えていました。齋藤さんのバルクチームは事前準備なんかも多かったんじゃないか

齋藤..正直すごく大変でした。ほぼ毎日作業に追われていました。ね。実はチームのメンバーだけじゃなく、コーチとか他大学のサークルとやっていて、外部の方も巻き込んでいます。そういう方との連携も大変だったんですが、それもSFCらしいイノベーションのひとつかなど。

—自分で変えることが出来るもの
—それぞれの活動を日常に取り入れていくとしたら、意識すべきポイントは何ですか。

齋藤..バルクは特殊な技も多いです。実際は普段行っている活動と共通する本質は「楽しみながら目的を達成していく」こと。自然が好きなら登山とか、そういう自分が好きなことをやっていたら気がつけば運動して健康になっただけだと思えます。

泉川..セルフフットワークという活動の本質は、やっぱり「自分を取り巻く環境は自分で変えることが出来る」ということ。どんな状況に置かれても自分の実力を出し切れるように、どうにもできないことを気にするのではなく、自分で変えられるものが何なのかを意識することが大切だと思います。

寄稿



東海林 祐子
(とうかいりん・ゆうこ)
政策・メディア研究科准教授
専門分野：ライフスキルプログラム、
コーチング

体育をオンラインで行うと決まった時は「うわーまじか！っ」って思いました(笑)。同時に、オンライン授業で身体活動とコミュニケーションが低下するのは予想できなかった。体育でそれをどうにか食い止めたという強い決意と覚悟を持ちました。

「SFC体操」の開発は短期間の取り組みでしたが学生間で協力関係が生まれ効果的だったと思います。春学期は、中澤研究室の学生が開発した「SFC」がSFCらしさを象徴する身体運動可視化ツールとして機能しました(これは学生より教職員でやると盛り上がりそうです)。藤井進也先生に「音楽と脳」というテーマで話していただいたり、上級生に音源を提供してもらったり、体育以外の教職員に審査していたり、両学部長から講評いただいたりと、SFCの資源をたくさん活用させていただき、体育

授業が成立したと思います。SAやTAも大活躍でした。学生の学びのためならできることは、何でも協力するよ」という環境はSFCの強みだと改めて感じました。

秋学期はSFCのクラスでしたがSFC体操の作成の時それぞれの国の体操の紹介やお国自慢などがあり、体育を通じて他の国の文化に触れる貴重な機会となりました。SFC体操の撮影も日本での動きと海外での動きが組み合わさるなど、距離はあっても、心の距離は短くなっているのを感じて毎回の授業で感動していました。

来年以降もSFCにある様々な資源を活用して、「体育が楽しみ」と思ってもらえるような環境を作りたいですね。



山田 貴子
(やまだ・たかこ)
総合政策学部非常勤講師
専門分野：ソーシャル
バージョン

四月、環境情報学部長の脇田先生から「家にいる。自分と大切な人の命を守れ。SFCの教員はオンラインで最高の授業をする。」というメッセージが配信されました。このメッセージを受けて、改めて、オン

ラインでも学生たちと一緒に、自分と仲間と社会とつながることができ、最高にワクワクする授業をつくりたいと思いました。どんな状況でも、今、ここから未来をつくることのできる！を授業を通して学生たちと体験したいと考えました。

その中で大切にしたいことはとてもシンプルです。一つ目は、授業の最初と最後に、今この瞬間の気持ちを仲間と共有することが出来る時間を大切にしました。この時間を重ねることで、この場では何を話しても大丈夫だ、という安心安全な関係性が生まれました。結果、秋学期の授業でも学生たちが本音で意見を共有し合い、共創することができました。

二つ目は、学生たちがクラスの枠を超えて、自由に話せるスペースを意図的に用意しました。昼休みの12:40-13:00、200mを開放し一緒にご飯を食べながらあーだこーだ言える大切な時間をつくりました。

そして、授業の初日にクラス全員で共有した「SFC体操を通してこんな自分になりたい！こんなクラスになりたい！」という目標に向かって、クラス全員でチャレンジを続けました。オンラインでもオフラインでも、どんな状況でも、自分自身が最高の授業、最高の大学生活のつくり手になれることを忘れずに来学期も一緒に楽しんでいきましょう。

編集部による座談会 ～進化し続けるSFC授業の実態～

KEIO SFC REVIEW 編集員による座談会を開催し、2020年度のキャンパスライフを振り返った。コロナ禍でオンライン授業中心の生活は一体どのようなものだったのか、メンバーたちの実際の声を取り上げた。また、座談会内での話題に上がった一部の先生・ゼミ生の方々から、オンライン授業に対する様々な想いを綴っていただいた。



剣持 里菜
(けんもち・りな)
環境情報学部 2年



大河原 さくら
(おおかわら・さくら)
環境情報学部 3年



浦田 優唯
(うらた・ゆうゆい)
看護医療学部 2年



青木 陽花
(あおき・はるか)
総合政策学部 2年



湯田 瑞希
(ゆだ・みずき)
環境情報学部 3年



山田 璃々子
(やまだ・りりこ)
環境情報学部 3年



飛弾 香花
(ひだ・よしか)
環境情報学部 3年



為谷 磨玲
(ためがや・まれ)
環境情報学部 3年



座談会の様子

● 試行錯誤のオンライン授業

「オンライン授業の中で、印象に残った授業スタイルがあれば教えてください。」

飛弾：辻本恵先生の「南極生態学」という授業では、参加したい人は授業開始前の数分間を使って先生と一緒にラジオ体操をしていて、面白いと思いました。

為谷：黒田裕樹先生の授業での出席の取り方が印象的でした。その授業では、先生が動画の中で「今日のキーワード」を発表され、それを正しく入力できた人が出席したとみなされる形式になっていました。そうすると動画を飛ばしてキーワードのところだけ聞こうとする人が出てきてしまうため、それに先生が対抗して一つの授業に複数の引っかけワードが入っていた時があり、さすがだなと思いました(笑)。

● オンライン授業だからこそ生まれた価値

「オンライン授業だったから助かったということや、オンラインで良かったと思ったエピソードはありますか。」

剣持：私は朝がすごく弱いので、こはオンラインで助かりました(笑)。

山田：授業を受ける場所が問われないことは良かったです。例えば私は学校から家が遠くて、空きコマがあっても学校にいるしかなかったのですが、今はキャンパスに通う必要がなくなっただけで時間を有効活用できるようになりました。

飛弾：大人数の授業であっても、意見を発言しやすくなったと思います。オンキャンパスの授業では教室で大勢の人に囲まれるけれど、Zoomでは先生とのコミュニケーションといった感じが強くて、発言しやすいのが良いなと思いました。

湯田：グループワークがやりやすくなりました。Zoomで会議、議論するという選択肢が増えたから時間を作りやすくなったから

こそ、夜中までみんなで話し合うことが可能になりました。

浦田：オンライン授業になったことで、看護医療学部生も総合政策学部や環境情報学部の授業を履修しやすくなったと感じます。看護棟からの移動時間を考える必要がなかったり、他学部の授業を履修する抵抗感も少なく「とりあえず受けてみよう」という気持ちになったのが良かったです。オンラインをきっかけに、総環の授業を履修する看護医療学部生が増えたら良いなと思います。

● わたしたちの、これからのキャンパスライフ

「今後もオンライン授業が続くことが予想されますが、未来に期待することはありますか。」

青木：オンラインでもSFC生と知り合える機会が欲しいです。オンライン授業を受けていて、やはり友達が良いと思えることが多くて、Zoomのプレイクアウトルームなどで気軽に

なった人とそれっきりになってしまうのは悲しいですね。オンキャンパスの授業であれば帰り道や移動時間に雑談ができていたように、オンラインでもそのような時間が欲しいなと感じました。

山田：「カモニング」はまさにそれを叶えられる企画ですね！「カモニング」は私が授業で企画したもので、一限の前の時間を使って、朝ご飯を食べながら、共通の授業や同じ趣味、同じ研究テーマでマッチングされたSFC生とZoomでお話するという企画です。これはオンライン授業でないと生まれなかった企画かなと思います。

剣持：あと井庭崇先生の「創造社会論」の授業では、授業の最後におしゃべりしてから解散するという取り組みをされていました。授業終了後に教室に残って喋って帰る、その時間をZoomでも再現する取り組みが面白いと思いました。じっくり人生相談みたいになっている時もあって(笑)。

オンラインでもSFC生と知り合える機会が欲しいです。オンライン授業を受けていて、やはり友達が良いと思えることが多くて、Zoomのプレイクアウトルームなどで気軽に

コロナ禍でも様々な工夫によって多くの学びを創出されてきた。ここでは、一部の先生・ゼミの方から、オンライン授業の取り組みについて伺った。



宮川 祥子 (みやがわ・しょうこ)

看護医療学部准教授



撮影に使ったミニカメラ



看護医療学部校舎を撮影したドローン



看護医療学図書室にて

「情報とネットワーク」の授業スタイルや「おまけ動画」についての概要説明
オンデマンド動画と遠隔リアルタイム授業を組み合わせ、テンポ良い授業を心がけました。毎回の授業後、「人間（じんかん）交流」をテーマに、教職員や大学の様子を感じてもらえるような「おまけ動画」をシェアしました。

ミニ課題のフィードバック。おまけ動画ではドローンや3Dプリンターなどのわくわくテクノロジーを取り入れています。
・オンライン授業を行うにあたり工夫したこと
平坦になりがちなデジタルプラットフォームに、あえて「アナログ」要素を取り入れました。毎回の授業の課題は「紙に書き」して「写メ」で提出。自分の手を使って書くことで身体を意識してもらいました。授業動画では大きく印刷したパワポ資料を「紙芝居」で見せ、資料に丸をつけたり線を引いたり。自分の手の動きを通じて画面の向こうの学生の脳をどう刺激するかを考えました。



【オンラインホワイトボード使用ハイブリッド授業】「Miro」というアプリを使用し、各班意見をリアルタイムで書き出し議論しました。内容をハイブリッド授業で共有しました。



【ハイブリッド授業運営丸秘グッズ】綿密なタイムラインを作り、ハイブリッド授業の運営をしていました。ビデオスイッチャー機器やLIVE配信カメラも導入しました。

オンライン授業は、身近な空間を対象にしたデザインの入門的な授業「パーソナルブレイスデザイン」でした。この授業では、手で絵を描くことを繰り返し練習します。手で描くことは物事の観察や表現の基礎として重要です。例年は、教室の机の間を歩きながら受講生の手元を見て回るのができませんでした。そこで、私の顔を写すカメラとは別に書面カメラをパソコンに取り付け、私の手元を上から写

すすかんゼミ

鈴木 寛研究会

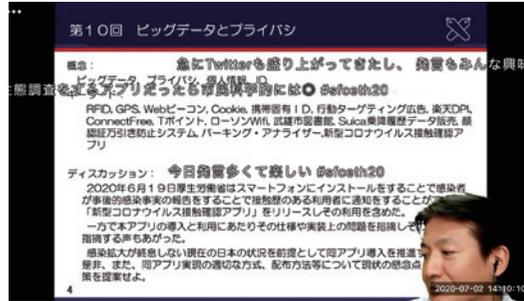
授業設計部長として取り組んできた総合三年の藤井あゆみです。「卒近代を率いるソーシャルプロデューサーを輩出すること」を掲げるすすかんゼミでは、「コロナ禍における最先端の学びの形を開拓し、社会に発信したい」という強い思いで挑戦してきました。春学期は「完全オンライン授業」の中でいかに「密な人間関係を作ることが出来るか、模索しました。授業では「Zoom」（全体的）と「Discord」（少人数の議論用、自由にルーム移動が可能）を併用しました。またオンラインホワイトボードを使用して議論

しながらスケッチや図面を描いてみせることにしました。このようにすると、受講生はそれぞれのスクリーンを通して私の手元を覗き込むことができます。これは、従来の授業ではできなかったことでした。この方法は受講生からの評判もよかったです。毎回の授業の最初に10分間の「手描きスケッチ入門」を実施することにしました。学期の終わりにはその部分の動画だけをつなげたビデオを作り、受講生に公開しました。



武田 圭史 (たけだ・けいじ)

環境情報学部教授



授業のハッシュタグがついたツイートを共有画面に表示して議論が活性化するという工夫しました。



せっかくの遠隔授業なのでアバターを用いた授業にも挑戦しました。ボイスチェンジャーを使用してかわいい声で授業を行ってました。

「情報と倫理」では情報技術の活用に伴い発生する様々な倫理的な課題について、実際の事例を題材にディスカッションを通じて情報倫理に関する知識や考え方を身につける授業です。以前より活発でテンポの良い議論の展開を特徴としていたので、オンラインでも対面と変わらない活発なディスカッションができるよう工夫をしました。授業はZoomで行い最初と最後にムービーを流しました。出席者は全員WebカメラONを必須とし顔が見える授業としました。ブ

レイクアウトルーム、投票ツール、挙手などのリアクションなどZoomの機能をフル活用し、独自のプログラムを用いて授業ハッシュタグ付きで発言されたツイートを共有画面上で右から左へ流れるようにするなどし授業を盛り上げました。また実験的にZoomの技術で男性の教員が女性キャラに変身して授業を試みる試みなども行いました。全体を通じて授業内での発言も活発で教室で対面で行うよりもインタラクティブで活気ある授業が継続して実現できたと感じています。



石川 初 (いしかわ・はじめ)

環境情報学部教授

オンライン授業を配信した自宅の机の様子。右上のカメラが書画カメラ。

書画カメラ。これで手元を上から写した。



配信された、スケッチ入門の手元画像の一部。

私が担当した初めてのオンライン授業は、身近な空間を対象にしたデザインの入門的な授業「パーソナルブレイスデザイン」でした。この授業では、手で絵を描くことを繰り返し練習します。手で描くことは物事の観察や表現の基礎として重要です。例年は、教室の机の間を歩きながら受講生の手元を見て回るのができませんでした。そこで、私の顔を写すカメラとは別に書面カメラをパソコンに取り付け、私の手元を上から写

しながらスケッチや図面を描いてみせることにしました。このようにすると、受講生はそれぞれのスクリーンを通して私の手元を覗き込むことができます。これは、従来の授業ではできなかったことでした。この方法は受講生からの評判もよかったです。毎回の授業の最初に10分間の「手描きスケッチ入門」を実施することにしました。学期の終わりにはその部分の動画だけをつなげたビデオを作り、受講生に公開しました。



連載 No.09

わたしの推薦図書



森嶋 桃子
(もりしま・ももこ)
湘南藤沢メディアセンター
レファレンス担当
専門分野：図書館情報学



みなさん、こんにちは。はじめましての方は、はじめまして。簡単に自己紹介すると、わたしはメディアセンター(図書館)の中の人で、公式Twitterの中の一人でもあります。みなさんはメディアセンターをどれくらい使っているでしょうか？ ほぼ立ち入ることなく卒業してしまう人

もいるらしく、それはそれでひとつの人生とは思いつつも、せっかく慶應に、そしてSFCに入ったのだから、本や雑誌やデータベースや3Dプリンターを使い倒して、ばりばり学費のもとをとって卒業してほしい、というのがわたしたちの切なる願いです。そのあたりは「Twitterの

筆活動を主として、アラビア語放送アナウンサー、アラビア語教育などにもたずさわっていらつしやいます。梨木さんが師岡さんの著作を読んだことがきっかけではまったこの往復書簡ですが、テーマは思想、旅、食べ物とさまざま、おふたりのやりとりは縦横無尽、ときに大地をしつかり踏みしめつつ、ときに鳥のような視点でこの星の上を駆けめぐり、ユーモアに満ちた親密な会話がなされるその場に、読んでいるこちらがそつと参加させてもらっているような、聞き耳を立てつつ美味しいお茶とお菓子をこちそうになつていような、そんな贅沢な時間を過ごすことができます。

スラームの世界は、なんだかとても親しいものに感じられてきます。ぶ厚くはないのですが、この本にはふと読む手をとめて考えさせられる文章が満ちています。いくつかりあげてみると、「短絡的に、帰属集団に個人のアイデンティティを丸投げし(中略)自らの優越欲求を満たす手段にする」(p.4)「歪んだナショナリズムに陥らない」「世界への向き合い方」(p.5)「何か、メディアの情報だけではふるい落とされてしまふ、個人対個人でなければ見えてこないもの」(p.33)「明確に定義された共同体への帰属によって居場所を得る安心感を、人々は求めている」(p.42)「違う文化がそこにあることを、とりあえずは認めよう、そしてできれば受け入れよう」(p.76)「個人にできることのキーワードになるものは(中略)それぞれの「寛容」を鍛え抜き、洗練された寛容にしていくこと」(p.78)「信仰は、神でなく人のためにあると思うのです。神は人を必要としませんから」(p.99)「今まで読んだものをすべてふるい落としたり、私には何が残るだろう」(p.112)・・・。

さて、これらの言葉をそつと手渡されたわたしたちは、どのようにこたえればよいのでしょうか。わかりやすい答えは提示されておらず、受け手がずつと考えてゆくべきものなのでしょうが、地球という、梨木さんのいうところのこの「チャームングな星」に生まれてしまったわたしたちが、戸惑いながらも、さて、どう生きてゆくべきか。そんなとき、「自分で誰かの靴を履いてみる」とは、ただ、世の中には本当に極端としか思えないような考え方を持った人たちもいて、たとえば陰謀論とか、Qアノンとか、そう簡単に彼らの靴を履いてみようなんて思えませぬよね。わかります。よくわかります。心の中のシャッターは一瞬で簡単に閉じてしまいます。でも、シャッターを閉じた時点で終わってしまう何かがある必要もある。彼らと意見を同じくする必要もないし、寄り添う必要もない、しかし、なぜ彼らがそのような思考に至ったのか、背景を想像しようとしてみることに、たとえば一冊の本を手にとってみることに、ひとり

参照
湘南藤沢メディアセンター Twitter (https://twitter.com/sfc_mediacenter)
ウェブサイト (<https://www.lib.keio.ac.jp/sfc/>)
Instagram (https://www.instagram.com/sfc_mediacenter/)
Facebook (<https://www.facebook.com/keiosfmc>)



連載 No.10

わたしの推薦図書



島津 明人
(しまづ・あきひと)
総合政策学部教授
専門分野：産業保健心理学、
健康科学、
行動科学



「私の推薦図書」の執筆依頼をいただいたのが、今から約一ヶ月半前。SFCの学生編集スタッフからの依頼ということで、お断りするのもし訳なく、引き受けることにした。これまでに執筆された先生方の原稿はどれも教養にあふれて格調が高く、締切までの短時間で先生方のレベルに追い付くのはとうてい無理だと

悟った。ということ、本稿では、約三年前を振り返り私が学生時代に印象に残った本を紹介したうえで、現在の研究テーマである「働く」「こころ」「健康」「ウェルビーイング」に関わる内容を、取り上げてみたいと思う。最初に紹介するのが『青春の門』（五木寛之：講談社）だ。言うまでもなく、

五木寛之のロングセラー小説である。芸大受験に失敗して浪人が決まり、将来への方向性を見失いかけていた時、ふと観たのが映画「青春の門…自立篇」だった。その後、各篇の小説を一気に読み進めた。地方から上京して大学生活を送ることになる主人公・伊吹信介と自分自身とを重ね合わせ、将来への模索が始まった。自立編の舞台となった早稲田大学にあこがれ、「都の西北…」（註：早稲田大学校歌）を口ずさみながら受験勉強に励んだ浪人時代を、昨日のように思い出す。

在京民放キー局に就職し、テレビCMの仕事に従事していた。パブル経済の終わり頃である。「24時間働けますか」というCMが流れ、デイスコ、お立ち台、トレンドイドラマなどが流行語となっていた。超長時間労働の毎日を過ごしながら、時おり、「何のために働いているのだろう」と自問した。学部時代に心理学を専攻し、ゼミの指導教授が働く人のストレス問題を専門としていたこともあり、働く人を対象としたところの問題、ストレスの問題を研究したいと思い、大学院に戻った。

翻って、今春SFCに入学する新入生は、SFCにどんなイメージを持ちながら受験生活を送ったのだろうか。また、SFCの在生はコロナ禍での学生生活を、どのように送っているだろうか。スクリーンを通じて仲間や先輩、後輩、教員との出会いや交流は、私たちのこころ、仕事、そして生き方にどのような影響を及ぼすのだろうか。

著者の磯川氏は、常態化した長時間労働、進んで引き受けるサービス残業、過酷なノルマなど、過労死・過労自殺への道を自ら歩みながら、不満を表明することさえしない日本人の勤勉性を、「自発的隷従」（自ら進んで圧政者に隷従している状態）というキーワードを用いて論考している。現在の日本人の勤勉性や自発的隷従は、江戸時代中期に形成され、わずか「数百年間の特徴」しか有していないらしい。しかし、なぜ日本人は「自発的隷従」をやめないのか、

なぜ「自発的隷従」について、自覚しようとしていないのか。

けることは、私たちの人生をより豊かで充実したものにしてくれるだろう。日本人の目を通してフィンランドの文化、暮らし、働き方、休み方などは、with/after コロナにおける生き方の参考になる。

『労働時間の経済分析』（山本勲・黒田祥子：日本経済新聞社）によると、「効率的に非効率なこと」をしながら長時間労働に従事する働き方は、周囲の環境次第で変えることができる。このこと。コロナ禍により働き方が大きく変化した現在、自発的隷従を改める好機かもしれない。磯川氏が終章で述べているように、なぜ人間は「勤勉」でなくてはならないのか、なぜ「怠惰」ではいけないのか。社会人になる前の大学生の間に、じっくりと考えてみてはどうだろう。

With/after コロナの生き方を考えるうえで、改めて私たち人類の歴史をたどってみたい。人類社会は、「狩猟社会」「農耕社会」「工業社会」「情報社会」と発展し、現在、デジタル革新を契機として「超スマート社会」と呼ばれる第四次産業革命を迎えている。IoT (Internet of Things) などのテクノロジーは、時間や場所に制限されない柔軟な働き方を可能にする一方で、「いつでも、どこでも仕事をしなければいけない」状況も生み出している。このような状況は、働く人びとを本人の意思に反して仕事に長時間拘束する「牢働」環境を作り出し、健康や生産性に悪影響を与えている可能性がある。

最後に、そもそも、ヒトはなぜ働くのだろうか？ ヒトにとつて働くことの目的は何だろうか？ 生活に必要なものを入手するという基本的・経済的なニーズを満たすだけでなく、自己実現を図ること、家族や社会の役に立ちたいという精神的なニーズを満たすことも、労働の目的となる。職場は社会とのつながりを作る場所でもあり、このつながりが社会的支援や社会的資本（ソーシャルキャピ

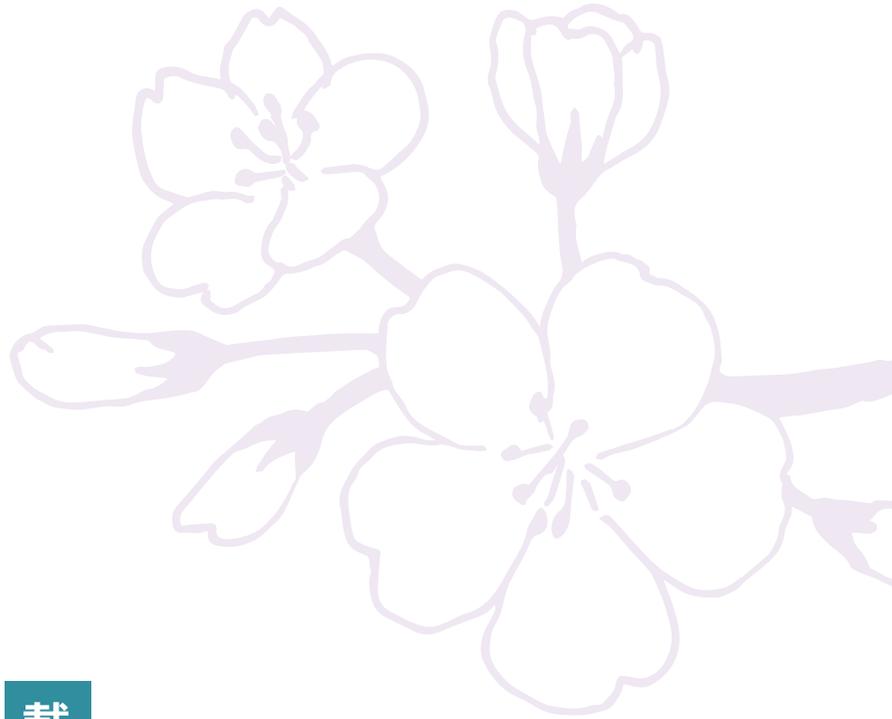
タル）として心の支えとなり、心身の健康や個人の成長を促進させる。一方、失業は労働を通じた社会とのつながりを喪失させ、私たちが抑うつ、孤独、自殺に追い込むことがある。このように「ヒトはなぜ働くのか」といった労働の目的や意味、その機能は多様である。「ヒトが人生で多くの時間を過ごす職業生活を通じて、どのようにウェルビーイングを発展させるか」。この問いに答えるために、私たちの研究グループでは、ヒトが仕事にやりがいを感じ、主体的に関わり、生き生きと働いている状態を「主体的朗働」と名付け、その形成・維持・発展に関わる生物・心理・社会的基盤を、学際的視点から探求する新たな学問領域を立ち上げた。キーワードは『ワーク・エンゲイジメント』（島津明人・労働調査会）である。最後は、自著の宣伝となって恐縮だが、働くことの意義を考える一助となれば幸いである。

働き方を考える際、海外の状況をすることも有用である。『フィンランド人はなぜ午後四時に仕事が終わるのか』（堀内都喜子・ポプラ社）の著者は、国連による世界幸福度ランキングで、三年連続首位を取得した駐日フィンランド大使館の広報官である。幸福の定義は多面的であり、国連による幸福度ランキングについても、もちろん様々な意見がある。しかし、経済的な豊かさだけでなく、幸福を構成する様々な側面に目を向

『一〇〇年後の世界』（鈴木貴之…化学同人）は、科学哲学を専門とする著者が、テクノロジーは幸せな未来をもたらすのか？という挑戦的な

課題について論考している。本書では、生殖医療、遺伝子操作、サイボーグ、不老長寿、人工知能、仮想現実などを取り上げ、「ガタカ」「ロボコップ」「マトリックス」などのSF映画を参照しながら、テクノロジーが社会にもたらす楽観的なシナリオと悲観的なシナリオの両方を論じている。SFCには、先進的なテクノロジーを用いながら社会課題の解決に挑む学生も多いだろう。テクノロジーと社会の未来を予測することは難しいが、だからこそ、楽観的なシナリオだけでなく悲観的なシナリオも想定しながら、テクノロジーに向き合う姿勢が求められる。

最後は、『ワーク・エンゲイジメント』（島津明人・労働調査会）である。最後は、自著の宣伝となって恐縮だが、働くことの意義を考える一助となれば幸いである。



No.01

データベース研究とビッグヒストリー

清木 康 (きよき・やすし)

慶應義塾大学名誉教授 (2021年3月退職)

1978年 慶應義塾大学工学部電気工学科卒業

1983年 慶應義塾大学大学院工学研究科博士課程修了

専門分野：マルチメディア・データベース、感性データベース、マルチデータベースシステム、意味的連想検索

●SFCの学生へメッセージ
我々人類は、地球上に広く存在する生命体として、地球規模での自然および社会環境の永続的維持、改善を重要な使命として実現しなければならぬ状況に直面しています。それらに必要、不可欠な探求は、個々の人間やコミュニティーの環境への意識と知識の獲得・共有に加えて、

●SFCの学生へメッセージ

●SFCのお気に入りのスポット
KEIO SFCでのお気に入りのスポット：デルタ棟 S107: MDBL (Multi-Dimensional Database Laboratory) (本立の中にある緑に囲まれた、空気が新鮮な研究室)での研究セミナー



●SFCのお気に入りのスポット

新 連 載

贈る言葉

この春SFCをご退職された先生方に、これまで長く教鞭を取られてきた中で特に記憶に残っていること・これからのSFCの未来についてご寄稿いただいた。「お気に入りの一枚」「SFCのお気に入りのスポット」と題した素敵なお写真と共にご紹介する。多様な学問領域の中を常に第一線でご活躍されてきた先生方の目には、どのようなSFCが映し出されているのだろうか。

環境維持・改善のための技術的システム、社会的システムの実現です。現在の地球規模の GLOBAL ISSUES である、急激な社会環境の変化、自然環境の変化、国際情勢変化、文化間の衝突、急速な科学技術発展は、我々の社会や自然を複雑系ともいえる状況にしています。
ここで、我々の宇宙、地球、人類の歴史をビッグヒストリーの視点から振り返ってみましょう。
BIG-BANG 理論によれば、一三八億年前に宇宙が誕生し、四十六億年前に地球が形成され、三十八億年前に最初の生命が誕生し、六〇〇・七〇〇万年前に人類の誕生(チンパンジーとの分離)が起こったと分析されています。そして、二十万年前に、我々の種であるホモサピエンスがアフリカに誕生したと分析されています。その後、八五〇〇年前に一部のグループがアフリカを出て現在のシナイ半島に到着し、一六〇〇〇・一八〇〇〇年前に日本に到着しました。ホモサピエンスの誕生以来、これまでの人類の歴史は語っています。文明は、INNOVATION の無いところでは発生しない、すなわち、文明は、CHALLENGER によって生み出されている、そして、INNOVATION の途絶えた文明は必ず消滅してきた。“

これらの事象は、理論物理学、実験物理学、生命科学、文化人類学、考古学、情報科学、社会科学研究などの結集によって、ここ数十年の間に解明されてきたものであり、それらを知ることができるようになった我々は、人類史上において初めて、我々自身の存在に至る過程を知ることができた最初の世代といえます。すなわち、宇宙の歴史の中で、なぜ我々がここに存在することができたか、存在しているかを(十分ではないが)、まだまだ不明な点も多いが)考えること、想像することが示す時代は生きています。このことが示す事実は、大きな新しい発見はSFCのエッセンスである、多様な学術のinterdisciplinarityによってもたらされることです。
私からKEIO SFCで学ぶ皆さんへのメッセージは、地球を守り、また、人類がよい方向へ前進するためのINNOVATIONを先導するチャレンジャーたること。
“CHALLENGE to INNOVATION WITH VISION, MISSION, PASSION and DREAM!”
SFCと皆さんの更なる発展を祈っています!



No.03

ポスト資本主義の新しい時代を迎えて

加藤 眞三 (かとう・しんぞう)

慶應義塾大学名誉教授 (2021年3月退職)

1980年 慶應義塾大学医学部卒業

1985年 同大学大学院医学研究科博士課程単位取得退学 (医学博士)

専門分野：健康科学、病態科学、消化器内科学

後日、松葉杖をつきながら廊下を歩いていると、後ろの方から看護学生が「かわいそう」とひそひそ話している声が耳に入ってきました。でも、患者はその言葉に傷つくのです。

「やっちゃったよ」と照れ笑っているところだ。

波新書)の中で、人類が始まって以来三番目と定常化を迎えると述べている程の大きな変化が訪れているのです。

市場化、産業化、情報化、金融化が進む中、単系的発展が飽和状態になろうとし、インターネットの普及、AIやロボット技術の急速な進展が加わり、社会が人に求める仕事は大



●お気に入りの一枚

二〇一四年十二月末に足関節の腓骨を骨折した翌日、市民公開講座「患者学」の集会を主宰していたのでギプスに松葉杖姿で参加した時に患者さんの一人に撮られた写真です。患者と市民、医療者と医療系学生が水

●SFCCの学生へのメッセージ



今、世界は大きな転換期を迎えています。広井良典氏が「ポスト資本主義 科学・人間・社会の未来」(岩波新書)の中で、人類が始まって以

市場化、産業化、情報化、金融化が進む中、単系的発展が飽和状態になろうとし、インターネットの普及、AIやロボット技術の急速な進展が加わり、社会が人に求める仕事は大

躍を期待しています。

それは、例えば医療の中で考えれば、ケアをすることの価値が飛躍的に高く評価される時代になることを意味します。未来の看護と医療的ケアの発展のために創設された看護医療学部の学生が活躍できる時代を迎えることになるのです。皆さんの活躍を期待しています。



No.02

身の回りには、研究ネタが一杯

武藤 佳恭 (たけふじ・よしやす)

慶應義塾大学名誉教授 (2021年3月退職)

1978年 慶應義塾大学工学部電気工卒業

1983年 慶應義塾大学大学院博士課程電気工修了

学位：工学博士 (1983年)

専門分野：ニューラルコンピューティング、電子おもちゃ、セキュリティ、温度差発電、横波スピーカー

一九九二年から二〇二一年まで授業をしましたが、私の知る限り、外部の要因で予定された大学の授業がキャンセルされたのは初めてです。慶應学内システムは外部からの不正アクセスによって二〇二〇年九月二十九日にシステム停止し、二〇二〇年十月一日に予定していた秋学期の授業開始は八日以降に延期し、一週間のすべての授業はキャンセルになりました。コロナ問題で、二〇二〇年の春学期と秋学期のほとんどがオンライン授業になりましたが、このセキュリティ問題によって、オンライン授業の脆弱性や問題点が明白になりました。私の場合、キャンセルせずに予定通りオンライン授業を行いました。オンライン授業を行うためには、履修している学生にオンライン授業のURLを送りオンライン授業をするだけです。そもそも、私は学内システムに頼ることなく、学生へのメールリストは、日頃から、学内の個人メールサーバーや、自宅のメールサーバーで運用しているの

私の研究室には多くの研究員がいて、天気予報を高速道路の管理会社が購入していることを確認しました。驚いたことに、大雪・高速道路問題は、高速道路のゲートの制御に天気予報を使っていないことでした。ゲート

参照1 : <https://doi.org/10.1080/19361610.2021.1874227>
参照2 : <https://doi.org/10.1016/j.treng.2021.100051>
参考文献
食糧問題 : <https://doi.org/10.1016/j.tifs.2020.11.012>
コロナ問題 : <https://doi.org/10.1016/j.jiph.2020.05.015>
有識者問題 : <https://doi.org/10.1038/d41586-020-02813-4>
防災問題 : <https://doi.org/10.1007/s11069-020-04087-5>
仮想通貨問題 : <https://doi.org/10.1021/acs.jchemed.0c00040>
<https://doi.org/10.1038/s41431-020-0597-9>
WHOの問題 : <https://doi.org/10.1038/s41415-019-0038-8>

●授業内で印象に残っているネタ
一九九二年から二〇二一年まで授業をしましたが、私の知る限り、外部の要因で予定された大学の授業がキャンセルされたのは初めてです。慶應学内システムは外部からの不正アクセスによって二〇二〇年九月二十九日にシステム停止し、二〇二〇年十月一日に予定していた秋学期の授業開始は八日以降に延期し、一週間のすべての授業はキャンセルになりました。コロナ問題で、二〇二〇年の春学期と秋学期のほとんどがオンライン授業になりましたが、このセキュリティ問題によって、オンライン授業の脆弱性や問題点が明白になりました。私の場合、キャンセルせずに予定通りオンライン授業を行いました。オンライン授業を行うためには、履修している学生にオンライン授業のURLを送りオンライン授業をするだけです。そもそも、私は学内システムに頼ることなく、学生へのメールリストは、日頃から、学内の個人メールサーバーや、自宅のメールサーバーで運用しているの

●学生へのメッセージ
身の回りには研究ネタが一杯あります。私の場合、いつも仕事をしながらテレビを聴いています。今年の冬、大雪で高速道路に何千台もの車が何日も立ち往生し、自衛隊が活躍していました。この問題に気づいて疑問に思えるかどうかが、SFCCが目指す、問題の発見と解決“のアプローチになります。大雪での高速道路問題を過去五年間ほど調べてみました。日本の高速道路は、スマート高速道路と呼ばれ、最先端の様々な気象センサーやカメラが数キロ毎に搭載されています。政府の有識者会議の結論は、チェーンを持つていない車が悪いことになっていました。私の研究室には多くの研究員がいて、天気予報を高速道路の管理会社が購入していることを確認しました。驚いたことに、大雪・高速道路問題は、高速道路のゲートの制御に天気予報を使っていないことでした。ゲート

制御のポリシーに天気予報を使っていないので、毎年同じ人災を繰り返していたのです。この問題も論文誌に掲載されました(参照2)。
コロナ問題も、食糧問題も、有識者問題も、防災問題も、WHOの問題も、身の回りの問題点を自分で調べてみると、本当のことが分かってくるはずですよ。

本誌ができるまで

「KEIO SFC REVIEW」編集部とは
「KEIO SFC REVIEW」は慶應SFC学会が発行している、SFCの公式広報誌です。SFCのキャンパス紹介をはじめ、教員・学生の最新の活動内容を掲載しています。また、卒業生やSFC関係者とのネットワーキングを支援する役割、さらには研究機関としての大学から社会へ向けてのメッセージを発信する意味を込めて1997年より刊行しています。

慶應SFC学会とは
慶應SFC学会（旧湘南藤沢学会：2020年4月1日に名称を変更しました）は、総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部、大学院政策・メディア研究科、大学院健康マネジメント研究科の研究・教育活動を促進し、学外との交流を深めることを目的とした組織です。原則として3学部・2研究科の正会員・準会員・学生会員により構成され、SFCの研究・教育活動のさまざまな支援をしています。



編集部の活動の様子
「KEIO SFC REVIEW」はSFCの学生主体で編集しています。本号の制作活動は新型コロナウイルス感染症の影響を鑑みて、すべて遠隔で進めました。

1. 企画
どんなメッセージを読者へ届けたいか話し合い、具体的な特集と連載の企画内容を決定します。



2. 取材
企画ごとにインタビューや座談会や寄稿など取材方法を考えて依頼します。引き受けてくださった方と連絡し、取材に臨みます。



3. 執筆
取材メモや録音データをもとに文字起こし、読者に伝えたいことが伝わるよう編集します。



5. 校正
読者の立場になり、わかりにくい表現を正していきます。何度も確認し、より良い形に仕上げます。



7. 配布
完成された冊子は、キャンパス各所で配布し、執筆者や取材先に礼状を添えて送付します。



4. レイアウト決め
デザイン担当者によるレイアウト作成です。デジタル技術を駆使しながら読みやすいレイアウトにまとめていきます。



6. 印刷
印刷所に入稿します。理想の形で印刷できるよう数回にわたり原稿データのやり取りをし、調整していきます。



▼「KEIO SFC REVIEW」編集部▼
E-mail: keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp
<https://gakukai.sfc.keio.ac.jp/review/jp/>

From editor

KEIO SFC REVIEW71号を手にとってくださいありがとうございます。いかがでしたか。

71号の制作期間はコロナウイルスの感染拡大防止のため、多くの学生が自宅で大学生活を送っていました。大学構内に人気はほとんどなく、まるで時が止まったかのよう。しかしそんな中でも歩みを止めず、新たな可能性を探りつづけるSFC生が沢山いました。KEIO SFC REVIEWはSFCの「今」を届ける広報誌です。ならばその様子を誌面にし、読者の皆さまと共有できる時間をつくりたいと思い、本号のテーマを「可能性を紡ぐー見出した新しいキャンパスライフ」に設定しました。71号の制作にあたり、先生方や学生の皆さまに多くのお力添えをいただきましたこと、心より感謝申し上げます。私たち編集部も、前号に続きすべてリモートで制作しました。編集長として、手探りの状況に不安を覚えたこともありましたが、前向きに頑張る編集部メンバーの様子や、原稿に綴られた言葉を見てとても励まされました。また、取材を引き受けてくださった方お一人おひとりの模索や葛藤、そこから見出した考えなどをお伺いしているなかで「思い通りにはいかなくても動いていれば活路は見えてくるのだな」と私自身、とても勇気づけられました。本誌を手にとってくださいました読者の皆さまとも共有できたら幸いです。改めまして、KEIO SFC REVIEW71号の制作に関わってくださいましたすべての皆様、本当にありがとうございました。

2021.5.31 編集長 山田璃々子

慶應SFC学会

発行人 池田 靖史 (会長/政策・メディア研究科教授)
担当幹事 秋山 美紀 (環境情報学部教授)
 東海林 祐子 (政策・メディア研究科准教授)
事務局 田坂 真美

編集長 山田 璃々子 (環境情報学部 3年)

副編集長 為谷 磨玲 (環境情報学部 3年)
 飛弾 香花 (環境情報学部 3年)

編集委員 大河原 さくら (環境情報学部 3年)
 湯田 瑞希 (環境情報学部 3年)
 青木 陽花 (総合政策学部 2年)
 浅野 悠人 (環境情報学部 2年)
 浦田 優唯 (看護医療学部 2年)
 剣持 里菜 (環境情報学部 2年)

協力

map制作 鈴木英佳 (環境情報学部 4年)

表紙画像 長島康生 (環境情報学部 3年)
 [Virtual SFC]-CGで作られたSFCの3Dモデル。研究会での測量データを基にして、有志によって作成された。2020年度のオンライン七夕祭などのイベントで使用され、オンライン下でのキャンパスライフを象徴している。

発行日 2021年6月20日

発行所 慶應SFC学会
 〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322
 0466-49-3437
<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>
keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp

印刷 株式会社ワキプリントピア
 〒252-0815 神奈川県藤沢市石川 6-26-19
 0466-87-5811
<http://www.printpia.co.jp>

無断転載・複製を禁じます。ご相談は慶應SFC学会までお寄せください。